2201　離島覚書（沖縄県・水納島）

令和４年４月 13 日

渡久地漁港

前泊した「民宿やまざき」を７時すぎに出発し、渡久地港に向かう。坂を登って国道 449 号に合流すると、その先に瀬底島が見えた。後述するように水納島は瀬底島の島民が移住して拓いた島である。瀬底島と本島との間には瀬底大橋という橋が架かっている。この橋は全長 762mで、1985 年２月に開通し、瀬底島は陸続きになった。ところで、「ゾウの時間ネズミの時間」の著者・本川達雄さんは琉球大学に在職中、瀬底島にあった臨海実験所にいたことがある。

途中のベーカリーでパンを購入し、本部町の街並みを見物しながら、渡久地港まで歩いた。ここから水納島行の高速船が通っている。渡久地には本部漁協があり、以前、山海倶楽部で扱っていたカツオ節はここから仕入れていた。もとの会社の同僚で、当時、琉球大学でヤコウガイの研究をしていた小松君と一緒に、この漁協へ挨拶に訪れたことがあった。

渡久地港は河口に発達した港で、港の入口には新本部大橋のアーチ橋が架かる。港内の通りにはダイビングショップなどが並ぶ。そこにウエットスーツを着てボンベを抱えた体格のいい若者たちが現れた。ダイビングショップの関係者かと思い、ちょっと話しかけると、レジャーダイビングではなくマグロ養殖の作業に向かうのだという。渡久地港を出た先にクロマグロ養殖の生簀が置かれているが、ここでマグロ養殖を営むのが大洋Ａ＆Ｆ㈱で、背後の集落に事務所があった。ダイバーはこの会社の職員だったのだ。全部で８基の大型養殖生簀が置かれ、クロマグロを養殖している。ちょうど出勤時間に当たるようで、６～７人のダイバーが次々と作業船に乗り込んでいった。

渡久地と水納島の間に合名会社水納海運が運航する「ニューウイングみんな」が１日３便運航している。新型コロナの影響で客が少ないことから、本来ならば４便のところを３便に減便していた。便数は需要に応じて大きく変わり、夏休み期間中は８便に増便される。運賃

は片道 880 円、往復だと 1,730 円である。

顧客は私を含めて乗客は 19 人だった。ペア７組、外国人の女連れ２人、女友達の連れ２人という内訳で、私以外は全員 20～30 歳と推定され、若い人ばかりである。

船は９時に渡久地港を出発した。大橋を渡ると、進行方向右手にクロマグロ養殖の生簀が並び、すでに給餌などに従事する人たちが作業にかかっていた。

進行方向左手に瀬底島、右手に伊江島が望める。なお、水納島という名前の島は沖縄県にもう一つある。宮古島と石垣島の中間あたりに多良間（たらま）島という島があるがその属島で、やはり小さな島で、数人しか住んでいない牧場の島だ。

大洋 A＆F が経営するクロマグロの養殖生簀（左）、水納島に通う「ニューウイングみんな」（右）

クロワッサンアイランド

水納島はサンゴ礁に囲まれ、島の北側から東側にかけて広大な砂浜が広がっている。したがって、サバニなどの小さな船以外は島に着けることはできない。このため、沖縄国際海洋博覧会（1975 年）後の 1977（昭和 52）年にサンゴ礁を掘削して水路がつくられ、桟橋もできて連絡船の受け入れ基盤が整った。桟橋の沖側には消波堤も築かれている。そして 1980（昭和 55）年４月に合名会社水納海運が設立されて、定期便が就航する。現在の高速船が就航するのは 1983（昭和 63）年のことで、運航時間は大幅に短縮された。

「ニューウイングみんな」は約 15 分で水納島の桟橋に着岸した。船着場には軽トラックが待機しており、島で発生したゴミ類が積み込まれた。島に焼却場がないので、本島で処理するのだろう。

水納島は渡久地から約８㎞に位置する三日月型をした小さな島である。国頭（くにがみ）郡本部町に属している。上空から見るとクロワッサンのような形をしていることから、クロワッサンアイランドとも呼ばれている。島の面積は 0.47 ㎞^{2}、周囲は 4.6 ㎞の小さな島で、数時間あれば島の全体が把握できそうである。

水納島は隆起サンゴ礁の島で、大部分が砂で覆われている。灯台のある北東側の地盤が高く、南西部に行くほど低くなるが、最も高いところで 27m なので、ほぼ平坦な島といえる。防波堤の手前には広大なビーチが続く。

集落は島の中央付近に形成されている。2020 年国勢調査時の人口は 19 人（男７人、女 12 人）、世帯数は 13 戸であった。2015 年国勢調査時点では 41 人、25 戸であったから、この５年間で人口、世帯数ともに半減している。人口が大きく減少したのは、３年前に島の小中学

校が休校になり、先生がいなくなったことが大きく影響している。実際に島に住んでいる人は、2020 年の国勢調査時と同じ 13 戸 19 人という（後述する移住者の仲田光雄さんを入れて）。

水納島には貝塚が発見されており、1,000～1,500 年前には古代人が住んでいたことが確認されている。その後、無人島になっていた。そこに人が住み始めるのは 1890（明治 23）年のことであった。

隣の瀬底島の製糖組の組合員が試みに各組 200 坪ずつを開墾し、木の根も掘らずに芋づるを植えたところ、秋には芋がよく成り、味も良かったので、1895（明治 28）年までに全部を開墾し、その土地を製糖組６組に大分して、さらに各組で組合員に配分して耕作するようになったという。製糖組というのは、サトウキビの植え付け、収穫、加工、黒糖づくりなどの一連の作業を協働で行う組織で、内間組、後久保組、棚組、中組、石割組、石嘉波組の６組であった。

ところで　琉球王朝は古来より土地の私有を認めておらず、３年から 15 年毎に土地の割り替えを行う「地割制度」を採用していたので、水納島の土地は当初、瀬底島の製糖組の総有地であった。最初のころは各組が水納島に小屋を建てて、原番と称する管理人を置いていた。島では、甘藷、小麦、豆、大根、落花生がよくできたという。ただサトウキビは作られなかった。海上荒れる冬季がサトウキビの収穫期で、この時期に瀬底島に運ぶのはリスクが大きいことによる。

水納島の桟橋と防波堤（左）、水納ビーチ（右）

明治政府は 1899（明治 32）年に沖縄土地整理法を制定し、同年から土地所有権の処分及び土地の査定に着手して、明治 36 年に終了、瀬底島でも土地整理で私有が認められた。そして製糖組の総有地であった土地は個人所有となり、島に定住する人が現れるようになる。ところが 1907（明治 40）年 10 月に水納島で収穫した農作物を船に積んで持ち帰る途中、海難事故を起こし、これを契機に水納島の土地を手放す人が増えた。一方では瀬底島から分家した世帯が水納島の土地を買い求める動きもでて、集落が形成されていくことになる。明治末期には 17 戸、戦前の 1942（昭和 17）年には 22 戸、人口は 120 余人に達した。

太平洋戦争中、米軍の上陸が必至となった 1945 年に住民への避難令が出され、島の人々は瀬底島や本島に避難する。しかし家庭の都合で島を離れられない人も多く、９戸 36 人が残ったという。

「瀬底誌」に掲げられている水納島の始祖ともいえる家は 19 戸である。学校の先生など

も住んでいたから、ピーク時には瀬底島に 26 戸 130 人が住んでいた。

植田夫妻と屋富祖さん

ゴミを運んできたのは、屋富祖良盛さんと植田智士さんだった。

屋富祖さんの先祖は瀬底島から移住してきた家である。植田さんは大阪の出身、琉球大学の理学部海洋科学科で学んだ。奥さんの正恵さんは埼玉県の出身で同じ学科の卒業生だから、学生結婚ということになる。２人が水納島に移住して 28 年になる。

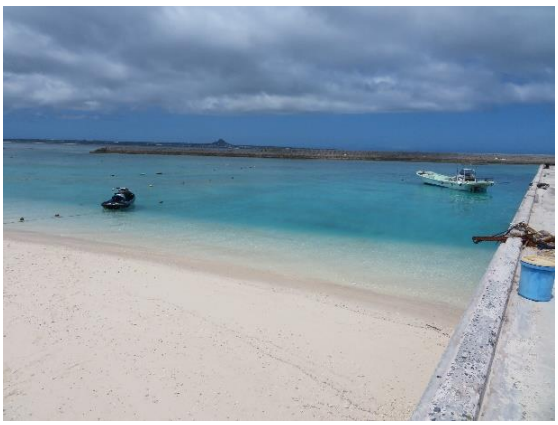
恐らく沖縄の海が好きだったのだろう。ダイビング部に所属していた。1980 年代から水納島を訪れるようになり、1995（平成３）年には「クロワッサンアイランド」というダイビングショップを前のオーナーから引き継ぎ、夫婦で経営していた。

しかし昨シーズンを最後に通常営業は終了したそうだ。植田夫妻は、ダイビングショップとは別に集落内の自宅で「海と島の雑貨屋さん」という雑貨店も営む。とんぼ玉やストラップ、Ｔシャツなどを製造販売している。その後、桑の新芽を摘んでいる智士氏さんに会ったが、自宅で２種類の陸亀を飼っているようだ。

琉大海洋学科の卒業生は、上述した小松君の他にも、現在、恩納村漁協の参事をしている比嘉さんなどと交流があった。２人のことを知っているかと思って、聞いてみるとよく知っているという。世の中、狭いものである。

小松君は私がもと勤めていた㈱東京久栄の後輩だが、同社が沖縄で海洋調査をするにあたっては、琉大の学生をよく使ったようで、「学生時代、アルバイトで大変お世話になった」と感謝された。小松君はヤコウガイの種苗生産の仕事をしていたが、その縁で、南太平洋のソロモン諸島に渡り、現地の人と結婚、現在は同国に住んでいるという。彼のはからいでソロモン諸島政府の漁業担当大臣がこの小さな水納島までやってきた。島始まって以来のＶＩＰだったから大歓迎したそうだ。

屋富祖さんは瀬底島から渡って来た三代目で、島を訪れる海水浴客へのパラソルの貸し出しと軽食を提供している。彼には「瀬底誌」に書かれている家のリストをもとに、水納島に渡って来た人々のその後について教えてもらった。



植田夫妻のお店・「海と島の雑貨屋さん」の概観（左）、ダイビングショップの船（右）

集落

船着き場からビーチを進むと、「めんそーれ水納島」と書かれた海水浴客用の休憩施設が

置かれている。その脇にサンゴ石でつくられた石畳の道路があり、坂を登ると水納島の集落に入った。右手に最初の家があり、それが民宿大城である。

集落は一つにまとまっていて、上述したように 13 世帯 19 人が住む。このうち植田夫妻と後述する仲地さんの２世帯３人が島外からの移住者なので、在来島民は 11 世帯 16 人（うち男５人、女 11 人）ということになる。女性のうち 80 歳以上のおばあさんが６人で、80 歳代が２人、90 歳代が４人という内訳だ。

集落内の家はどこも人が住んでいるようで、空き家は見当たらない。最初の十字路を右折した突き当りが旧小中学校である。その手前に「コーラルリーフ・イン・ミンナ」という民宿がある。つまり、島には現在２軒の民宿が営業している。十字路の先に「シークレット・ビーチ・ハウス」というログハウスのコテージが２棟あり、ここではシーズン中、カレーライスやタコライス、かき氷、飲料などを提供、バーベキューもできるようだ。

集落内の道路はサンゴ石を敷き詰めて、舗装されている。家の周りでは様々な野菜類がつくられている。ちょっと観察しただけでも、ジャガイモ、ラッカセイ、ニンジン、タマネギ、キュウリ、ニンニク、ゴーヤ、トマト、ミニトマト、ラッキョウ、長ネギ、里芋などきわめて多様性に富んでいた。

ところで水納島には漁師はいない。漁港がなかったから漁船を持てず、せいぜいサンゴ礁に生息する魚や頭足類、貝類などを自給用に採っていたにすぎない。したがって島の収入源は農業であった。一時期、サツマイモ、大根や西瓜などが換金作物として島外に出荷していたようだ。ちなみに現在島外に出荷する人は１人だけになっており、ニンジン、大根、ジャガイモを本部町の市場に出荷しているという。

高度経済成長により貨幣経済化が進むと、水納島でも現金収入源として牛の繁殖が試みられたが、後述するようにうまくいかなかった。結局、本土復帰とともに、多くの観光客が沖縄を訪れるようになり、マリンスポーツ関連の観光客がもたらす観光収入に島の経済は大きく依存するようになる。新型コロナが流行る前の 2017 年度の観光客は約７万人であり、２軒の島の民宿には 2,700 人が宿泊している。

民宿以外では、島民のほとんどは５～９月までの観光シーズンを中心に、レジャーボート、水泳器具、パラソルなどを貸し出し、また軽食や飲料を販売して収入を得ている。

サンゴ石で舗装された水納島の集落（左）、集落の間にある自家菜園（右）

小中学校

最初の十字路を右折した突き当りに水納小中学校が置かれている。校門の脇に分教場創設 50 周年・独立 30 周年と書かれた石碑が置かれていた。また、大きな掲示板があり、小中学校の概要と水納島を紹介する文書が書かれていた。その記述から水納島の小中学校の沿革を紹介しておこう。

「瀬底誌」によると、水納島の教育は 1920（大正９）年に瀬底島から派遣された先生が４月と８月の２回、１週間程度行う特設授業が始まりで、当時の生徒数は３人だった。

校舎ができるのは 1937（昭和 12）年のことで、茅葺校舎が建てられ、瀬底尋常高等小学校の水納分教場となる。当時は１年生から６年生までの子供を１人の教師が教える複式学級だった。戦後の学制改革により８年制から９年制になり、1957（昭和 32）年に瀬底校から分離して、水納小中学校として独立する。本土復帰後の 1972 年から本部町立水納小中学校となっていた。現有する校舎は 1985（昭和 60）年に落成したものだ。

戦後の一時期は児童生徒数が 44 人とピークを迎えるが、その後、子供の数は年々減少し、2019（令和元）年には小学生が１人だけになっていた。その小学生も兄弟とともに本島に移住したことから同年３月から休校になった。休校と同時に先生もいなくなったことから、これを契機に島の人口はさらに大きく減ることになった。

校門の脇には先生たちが暮らしていたと思われるＲＣ２階建ての教員住宅があった。

本部町立水納小中学校の正門（左）、同校の校舎と校庭（右）

共同牛舎跡

小中学校を訪ねてから、島の西はずれの西の浜に向かって歩くことにした。小中学校の正門の前に民宿「コーラルリーフ・イン・ミンナ」がある。道路を挟んだ反対側の家には 90 歳を過ぎたおばあさんと埼玉県から里帰りしていた娘さんがいた。

小中学校の先に亀甲墓が数基並んでいて、その前で男性が農作業をしていた。彼は冬の時期だけリーフ内でタコを獲るという。タコは冬場の寒い時期にリーフ内に移動してすごし、水温の上昇と共にリーフ外に移動するという。タコは水産物の中では唯一お金になり、出荷するそうだ。他の魚類はもっぱら自家消費用に獲るらしい。

少し歩くと、共同牛舎の残骸が見えてきた。この牛舎は復帰後の 1976（昭和 51）年に国の補助を受けてつくられたもので、６～７戸がこの牛舎を利用していた。そして最盛期には 100 頭ほどの牛を飼っていたようだ。おそらく子牛の繁殖農家だったと思われる。しかし牛

を飼うには毎日牧草を与えなければならず、牧草の刈り取り作業が高齢化した島の人たちにとっては負担だったことと、一方では復帰を契機に観光客が大勢島を訪れるようになり、しかも現金収入になったことから、年々、牛飼いから撤退する人が相次いだ。最後まで残った与那嶺徳松さんが６～７年前に廃業し、以来、牛舎は放置されたままになっている。

その後、黒毛和牛の子牛の価格は大幅にアップしているので、そのまま継続していれば、今頃はけっこう儲かっていたのかもしれない。

一本道を進むと西の浜に突き当たり、海に出た。ただし、サンゴ石がごつごつと並び、わずかばかりの砂地があるだけだ。このあたりが最もリーフの幅が狭い場所にあたる。

西の浜に続く道（左）、放棄されている共同牛舎の残骸（右）

バナナとパッションフルーツ

西の浜からもと来た道を引き返すと、道端にバナナの株が固まって植わり、小学校の近くでお会いしたおばあさんと娘が、収穫の終わったバナナの株（一度収穫するとこの株にはバナナがならないから切り倒す。わき芽を伸ばすとそちらにバナナが着く）を切り倒し、実のなっていない房の下部を切断する作業をしていた。

このあたり一帯は全て畑だったそうだが、耕作する人がいなくなり、荒れ放題になっている。以前はサツマイモ、大根、西瓜などをつくっていた。これらの野菜は砂地がよくあい、品質の良いものが採れて島のブランドになっていたそうだ。もちろん島外に出荷していたのは上述したとおりだ。

周囲を見渡すと、立ち枯れした大きな木が目立つ。モクマオウという木で防風のために植えたそうだ。真偽のほどは定かではないが、娘さんによると風の影響で枯れたという。この木は島で唯一、燃料として使われた貴重な木だったそうだ。モクマオウがない時は、アダンの葉が燃料に用いられたという。

小中学校の裏手に２棟の温室が並ぶ。温室内ではパッションフルーツ、ドラゴンフルーツ、ミニトマトが植えられていた。パッションフルーツは花が咲いた段階、ドラゴンフルーツは花も見られなかった。ミニトマトはすでに収穫の終期に入っていた。この温室のフルーツは湧川順子さんが作っているとのこと。島で農業収入のある人は２人いると聞いていたので、おそらく収穫物の一部は島外に出荷しているのだろう。

道端のバナナ（左）、温室でつくられているパッションフルーツ（右）

井戸

再び集落に戻り、続いて島の東端にある灯台に向かう。水納島は東側が砂丘を形成し、少し高くなっているので、緩い坂になる。島の東側は比較的木が多く、農地は少なかったようだ。

途中、拝所のあるところから海に下る道があったが、砂浜までは険しい坂になっていた。観光客とおぼしき５～６人の男女が坂を登ってきた。

アダンの林を抜けると白い灯台が現れた。灯台は 1970（昭和 45）年に完成した。周辺は全く視界が悪い。すぐに引き返し、島の南東部に２つある井戸を見に行った。

１ヶ所は広場のような場所の中央にあり、サンゴ石で丸く囲った井戸だったが、土砂で埋まり、水はない。奥に御嶽のような場所があった。こちらが開墾時代に掘られた「古泉井（フルガー）」と思われる。もう１ヶ所は木々に囲まれた場所にあり、こちらは四角形の井戸である。脇には何かを洗うために使われたと思われる石造りの広い洗い場が併設されていた。この井戸には昭和８年竣工の文字が刻まれていたので、「新泉井（ミーガー）」だろう。

２つの井戸の水は塩分を含み、飲料水としては適さなかったようだ。このため、島の各家には天水を貯めるコンクリート製の貯水槽が置かれ、もっぱらこの水が飲料に使われていた。

広間に置かれた円形の井戸（左）、林に囲まれた四角形の井戸、脇に洗い場がある（右）

1981（昭和 56）年３月に瀬底島からの海底送水管、海底送電線が完成し、水と電気が確保できるようになり、ようやく水納島は不便な生活から解放されることになった。

ところで、両方の井戸の周りの地面にたくさんの穴があいている。土壌は砂なので穴に砂を落とすとさらさらと落ちていく。簡単には埋まらないところをみると、相当深そうだ。後述する仲地さんの話ではこの穴はカニの巣穴だという。ヤシガニもいるが、この穴はヤシガニのものではないらしい。海からだいぶ離れているので陸生の甲殻類に間違いないだろうが果たして何というカニだろうか。

移住者・仲地光雄さん

井戸から集落に戻る。集落の入口付近に芝を張り詰め、よく手入れされた小綺麗な庭をもつ平屋の家があった。家の前は畑になっており、西瓜の苗を植えたばかりのようだった。

この家の前を通りかかると、住人がいた。井戸周辺の穴のことも気になっていたので住人に声をかけると、「コーヒーを飲んでいけ」といわれ、テラスの椅子に案内された。遠慮なくお邪魔し、コーヒーを御馳走になりながら、話を聞いた。

仲地光雄さんという 10 年前に島にやってきた移住者だった。名護にも家があり、月のうち約 20 日間を水納島で過ごし、10 日ほどを名護で過ごす２重生活を楽しんでいる。高校の校長まで務めた教員で、無農薬の農業を実践し、「昭和」の生活をしようと島にやってきた。したがってパソコンもスマホもない。

上述した屋富祖良盛さんと知り合いだったので、この土地を紹介してもらい家を建てた。３年がかりで芝を植え、植木の苗を船で運んで植栽したという。島という小さなコミュニティだが、煩わしいことは一切なく、芝を張るのも島の人たちが手伝ってくれたという。

井戸の近くのカニ穴とは別に、水納島にはヤシガニも生息しているとのこと。夜行性で落花生を収穫した後によく出没するらしい。島の人はヤシガニをボイルし、味付けはせずにそのまま食べるそうだ。

そしてちょっと気になることを話してくれた。

リゾートブームのころ、開発業者によって島の 1/3 ほどが買い占められたようだ。おそらく木々が残る島の東部だろう。しかし島民は開発に断固として反対し、開発を許さなかった。ところがここにきて島の人口は減る一方で、植田夫妻と仲地さんを除く在来島民は 16 人になってしまった。このまま推移すると無人島になりかねないという危機感が島民の間に芽生えているらしい。大きなリゾート施設ができれば、島に雇用が生まれ、やがて島出身の若い人も戻って来るのではないかとの期待されているようだ。

仲地さんの別邸（左）、西瓜の苗が植えられた仲地さんの畑（右）

島がリゾート地に変わった例としては熱海の沖の初島や八重山列島の小浜島が知られている。島の規模からみると、水納島は初島に近いと思われる。ちなみに初島の場合はリゾートホテルと島民の商売が共存し、うまくいっているから、水納島を無人島にさせないためには理解できる話なのだが、共存の方法をよく勉強してもらいたいものだ。

ンナートゥ（港）

島の南西部に湾入する馬蹄形の湾はンナートゥ（港）と呼ばれている。帰りの船の時間まで多少余裕があったので、湾の南側の先端まで歩いた。

湾内には細い水路が掘られ、船の避難港として利用されていたからンナートゥ（港）と呼ばれた、理由だろう。桟橋ができるまで島の北部は広大な砂浜が連なり、船が入ることができなかった。島の南西側のこの入江を開削して船が入れるようにしたものだ。

湾の干潟部にはシマシラキが群生し、さらに上段にはアダンが茂る。この湾は戦前から昭和 20 年代まで塩田として使われていたといわれている。

湾口部の幅は 150mほどしかない。新旧教員の離着任式には島民総出でこの湾の入り口に網を張り、湾内の魚を獲って、歓送迎会の食膳に並べたそうだ。

帰り道で植田さんに会った。路傍の桑の新芽を盛んに摘んでいる。自宅で飼っている陸亀の餌になるようだ。

馬蹄形の湾内・干潟が広がる（左）、湾の先端は石灰岩（右）

船着場まで急ぐ。第２便が水納島に着いた。16 人が下船した。13 時 30 分の船で渡久地港に戻る。朝と同じように歩いて民宿に行き、預けていた荷物を受け取って、本部港まで歩き、「やんばる急行バス」でおもろ町まで行く。

【文献】

湧川正義（1995）：水納島，瀬底誌．瀬底誌編集委員会．621-646.

橋本倫史（2022）：水納島再訪、講談社．東京．pp.236.